

座巻

特54

66

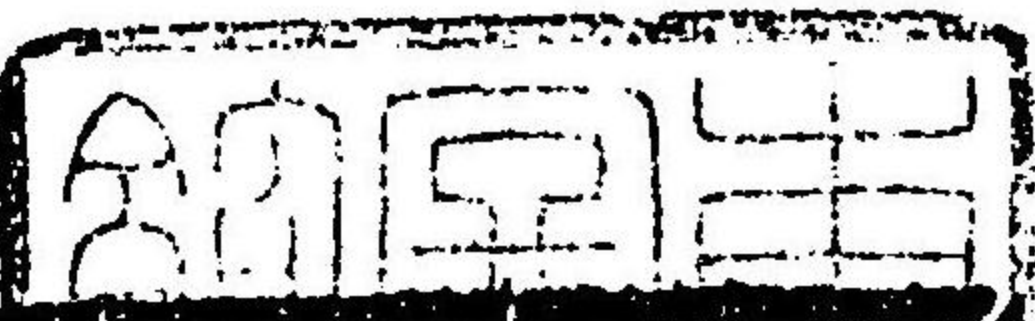


新編 座巻

新狂言新舞臺越後立讀
 一番目 北條九代名家功
 中滿來 北條九代名家功 三幕 筋書
 ○序幕 深川八幡の場 (同三十三間堂の場) ○貳幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○三幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○四幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○五幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○六幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○七幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○八幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○九幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○十幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○十一幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○十二幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○十三幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○十四幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○十五幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○十六幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○十七幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○十八幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○十九幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○二十幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○二十一幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○二十二幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○二十三幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○二十四幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○二十五幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○二十六幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○二十七幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○二十八幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○二十九幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○三十幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○三十一幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○三十二幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○三十三幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○三十四幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○三十五幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○三十六幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○三十七幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○三十八幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○三十九幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○四十幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○四十一幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○四十二幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○四十三幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○四十四幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○四十五幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○四十六幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○四十七幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○四十八幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○四十九幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○五十幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○五十一幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○五十二幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○五十三幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○五十四幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○五十五幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○五十六幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○五十七幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○五十八幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○五十九幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○六十幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○六十一幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○六十二幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○六十三幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○六十四幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○六十五幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○六十六幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○六十七幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○六十八幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○六十九幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○七十幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○七十一幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○七十二幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○七十三幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○七十四幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○七十五幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○七十六幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○七十七幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○七十八幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○七十九幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○八十幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○八十一幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○八十二幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○八十三幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○八十四幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○八十五幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○八十六幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○八十七幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○八十八幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○八十九幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○九十幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○九十一幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○九十二幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○九十三幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○九十四幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○九十五幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○九十六幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○九十七幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○九十八幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○九十九幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場) ○百幕 目黒西尾邸の場 (同三十三間堂の場)

北條高時	田樂法師の天狗	市川 新藏	正木段介
本間山城左衛門市川團十郎	市川 團六	長崎次郎	大野次郎兵衛
赤黒兵太	市川 團六	市原半九郎	中村勘五郎
新田義貞	市川 團六	市原半九郎	中村勘五郎
西尾正作	市川 團六	市原半九郎	中村勘五郎
三河守綱國公	市川 團六	市原半九郎	中村勘五郎
山口官十郎	市川 團六	市原半九郎	中村勘五郎
依田主馬	市川 團六	市原半九郎	中村勘五郎
植木屋五郎	市川 團六	市原半九郎	中村勘五郎
寶八郎口三郎兵衛	市川 團六	市原半九郎	中村勘五郎
小栗の妻おかん	市川 團六	市原半九郎	中村勘五郎
山城の妻おかん	市川 團六	市原半九郎	中村勘五郎
新造八ッ橋	市川 團六	市原半九郎	中村勘五郎
五郎介女房お菊	市川 團六	市原半九郎	中村勘五郎
鳴瀬作十郎	市川 團六	市原半九郎	中村勘五郎
大館次郎	市川 團六	市原半九郎	中村勘五郎
若徒作藏	市川 團六	市原半九郎	中村勘五郎
安達三郎	市川 團六	市原半九郎	中村勘五郎
岡崎上水	市川 團六	市原半九郎	中村勘五郎
片山左内	市川 團六	市原半九郎	中村勘五郎
豊岡紋三郎	市川 團六	市原半九郎	中村勘五郎
侍女お鏡	市川 團六	市原半九郎	中村勘五郎
五平次妹お鶴	市川 團六	市原半九郎	中村勘五郎

○明治十七年十一月七日出版御届
 編輯兼出版人 京橋區鈴木町十三番地 松田吉五郎
 發行元 松田吉五郎



第一番目 新舞臺越後立讀 八幕 筋書
 同中滿來 北條九代名家功 三幕 筋書
 ○序幕 深川八幡の場 本舞臺石の玉垣同じく鳥居出茶屋地内の体置拍子にて幕明茲に足輕三人床几は掛り茶見世の娘茶を出て居る(足輕)けふ若殿が三十三間堂へお越え成此頃新調のお可とお試し被成るか扱々武藝のお好きな事だ(娘)あなた方どのどちらのお屋敷で入らつしやい升(足)越後家だといふ此際所へ向ふより茶見世の娘お雪出て来り(お雪)どうも開根様お目も懸りたいといひふたふへ来る是より足輕はお雪に酒の相手をしろといつて困せる爰へ鳥居の内より足輕段助出て三人へ金をやり三人は娘を連れて酒を呑に行跡に段助お雪残りおかげで難儀を所を助りしと禮をいふ是より(段)國よ居た折りおきたの親の玄祐先生どの深ひなじみどふか己の女房も成てくれと口説(雪)今の茶見世の女でも小栗へ出入の醫者の娘が足輕づれの女房よとの母さんが承知せまいといふ上手より

以前の娘出て今の生計が来るから送るといふ是にてお雪娘鳥居の内へ還入る跡は段介残りいつか國で口説た時耻をか、せたまれの親行衛まれすと云ふらせと實は小栗の屋敷でくたばり其時れれも手傳て庭へ埋たる口留金を小栗さまから貸たが敵同士が夫婦に成とあいつを女房にしてへものだ爰へ上手より成瀬作十郎出てコレ段介左様な少さ希望より大きい申しに乘と是より兩人小栗の下知に随つて首尾能行バ立身出世と此筋まで道具廻る
 ○三十三間堂の場 本舞臺後ろ白木の板羽目所々に奉納の傾弓矢を飾り都て通し矢の体爰は若殿綱賢公西尾正作印籠を守護して居る其外郎七九郎生田郷左衛門諸士小性豊岡紋三郎大せい附添ひ居て武藝の断しめつて綱賢公四人の諸士を相手に試合をして四人を打とへる(綱)此上は正作相手を致せといふを(正)御印籠を守護して居るゆゑ御免を願ふ爰へ向ふより小栗英作出て一刻一粒仙丹の入し印籠を預り是より(綱)試合は成る八幡山の鐘聞へる

一刻毎に服す仙丹ゆゑ時の鐘を聞て仙丹と服す(正)若殿
にハお薬の落付迄御休息遊ばせといふ(綱)然らば予が代
りに誰ぞ正作と立命といふ愛へ關根彌次郎出て正作と立
合此柔術の中ハ綱賢公苦痛の体になり皆々悔りて介抱
成小栗一大事の御容体紋)片時も早く乗物(綱)此粟田
口久國ハ彌次郎へはうびよ遣す又有りハ尺八は正作へ遣
はすといつてうつとりする(小栗)アイヤお心遣いお持遊
心せ皆々氣遣ふ体よて幕

○二幕目西尾邸の場 本舞臺二重本縁附上手に床の間都
て此道具雪持西尾邸庭先の体中間下女雪をういて居てア
、寒ひくけふは若殿の百ヶ日で若旦那さまは長恩寺へ
佛參にお出被成たがお書き事だらうといふ愛へ腰元出
て大旦那から御酒を下されたから早く仕舞て一ト口香被
成ませといふ夫ハ有難いと皆々下手へ道入る向ふより西
尾正作仲間附て歸り來て腰元奥へ知らせる奥より親正左
衛門出て(正左)嘸寒かつた事であらう奥へ往て休め(正)

然らハ御免と奥へ道入る(正左)我子が成長すつつけ大
殿の御心中思ひやらるゝきのふけふの様に思ひしがもう
百ヶ日も相濟ば早く御家督を定めたいものぞ愛へ向ふよ
り關根彌次郎出て來り頼み申と中間取次ぎこちらへ通
る兩人挨拶あつて(彌)扱先刻山田が密に申ハ綱賢公お隠
れに附明日の御家督定め則御家督を存内にて拜見せしよ
思ひも寄ぬ小栗の惚大六をもつて御世嗣と定めらざしと
申事數多御血筋のある中に家來の悴を御家督に遊ばそ時
は一家中に必き為藤生する道理殊々美作家國を押領ささ
んも斗られず此お世嗣をさげんにはいかゞなしたるもの
あるか御相談に參つて(正左)御尤なる其御配慮是ぞ
愛妾於吟の方の斗らひに相違なし尤大六お身のはしゆゑ
御縁ささよもあらざれと近きお血筋と差置て家來の悴を
跡目との其意を得ざる事なり此時奥にて尺八の音聞ゆる
(彌)今吹出を音聲こそ正作どのが拜領の有明の尺八から
ん(正左)調子の狂ふハ胸迫り自然亂るゝものからんと兩

人愁ひの体よて此道具廻る

○同佛間切腹の場 本舞臺正面に佛壇上下讀愛へ正作經
机の上へ尺八と書置を乗せ回向して居て(正)忠臣無二の
美作と常に思ひれりしゆゑお印籠を預けしは我一生の不
覺なり申譯の爲今宵切腹おしてお詫致せバ身の大罪
は御用捨て下さりませと腹を切らふとする愛へ(正左
彌)出て是を留大六が世嗣の事をいひ証據と成べき一通
を殘まて自害しろといふ是にて書置を彌治郎へ尺八添て
紀念に渡し父が行末を頼む(彌)外ならぬ義弟の頼と必き
跡を氣附ふさといふ(正)介借をしてくれと頼む(彌)其義
の御親父へ(正左)イヤ是は義兄へお頼み申(彌)然らば介
借仕つらう(正)イヤ切腹と刀を腹へ突立幕
○同返し御金藏前の場 本舞臺松並木後ろ土藏の書割
都て春日町の体雪ふせて火の廻り二人こんさ晩にハ火の
用心より痴氣の起らぬやう身の用心くど道入る向ふよ
り關根彌次郎作藏を供ふ出て來り(彌)大ぶえんしやうの

香が致すがコリヤ作藏うつかり致すと鎧砲玉が飛て來る
といふ(作)エ、悔りせる此時ボンくと二つ玉の音する
兩人悔りして其儘倒るゝ、鳴瀬作十郎出て大力無双の彌次
郎を身か手練の砲術でまんまど首尾能打ハ小栗さまに
ハ嘸安心ドレそつ首を落してくれんと掛る關根彌次郎
鳴瀬を取て押へ立廻りよ成りトハ鳴瀬を滑る是よて作藏
を助々共方ハ我宅へ歸る有金并ハ先祖の位牌を持って國へ
密かよ今宵の内に歸れ(作)そりや何ゆゑでムリ升(彌)子
細い道で尋ねて行其折いふといふ作藏せひあく上手へ道
入る跡鳴瀬心付き切て懸る(彌)こやつの首を割取て夫を
証據よ小栗が郎へと兩人立廻り乍此道具廻る
○小栗邸の場 本舞臺高貳重の高樓都て白雲閣の体小栗
切腹しやうといふを奥方たかん外に諸士八八留て貴殿の
御無念尤なれと切腹あるは御短慮なまづくお持下さ
れい(美)今日の御家督も一同得心の休なりしが關根彌次
郎若殿の横死を云立正作が切腹なせバ大六を御家督と定

めなば此美作も切腹を致さしや成らぬと云掛り尤某が印籠を手ふれし事なれば疑念を晴す此切腹是を又止め大六殿の御家督を御免願ひを立られて三河守綱國公と世嗣となし此綱國が江戸詰に淫酒を進め隠居させ其後御子息を御世嗣と被成る時は憚る事なし左れば高田の家國頼て御手に入ると云是を美作以の外成る謀反進めど此美作の忠義一圖と立腹する妻かかん是を聞自害をしやうとするを留て(美)そちや何ゆゑかかん)此身か殿の妹ゆゑ我子を世嗣と立ん事願ひしと思へれんも取一ひ夫ゆゑどふぞ私に命のお暇下さりませ(諸)れかかんのが自害しての殿の思召もいかゝあらんこりや御思案を被成と成るま(美)ま、いづれ後刻お返事致せと一間で休息してくれといふ腰元紐梅出て酒宴の用意が調ひ升たといふ皆々夫をてうたい一乍能返事をお待すど這入る跡に美作お勘残り(美)奥味く参つたノウ三年跡は明石侯が此美作ハ未始終謀反を巧む者あるも急見の爲と疑ふて眉間を打れ

た其時の無念の今に忘れぬ(おかん)夫も此身を若殿の妻にお望を被成れしをあたへ嫁して参りしゆゑ夫が恨の元とありといふ此言合せの内侍一人出て只今鳴瀬氏がか歸りといふ(美)首尾能關根を打たるの早く様子を聞たいものだと此道具廻る

○小栗郎廣間の場 本舞臺一面立浪の瀬向ふより關根血刀を提出て來り(彌)首尾能是迄込入しがとふか小栗を討度ものごと愛へ腰元詰士追ひくは出るを一々切倒し與へ這入る跡へ與方出て(おかん)借の鳴瀬が打損せしかお怪我の幸ひ内御前も早ふお立退被成バよいが道具廻る

○元の白雲閣の道具に戻り愛ふ小栗關根諸士立掛り居て(彌)大悪人の小栗美作切腹しろといふ(美)發狂おしたる關根彌次郎とれ打てとれといふ立廻りも成り美作ハ奥へ這入る跡は彌次郎二人の侍を切倒し(彌)美作と打もらせバ一ト先當家を退去おし時節を待んど白壁へ血沙よて書置を殘しイダヤ當地を退去なさん跡白雪と幕



○三幕目北條家門外の場 本舞臺一面の筋場上手に白木の門爰へ駕に乗せし犬を四人の犬掛り守護して居る時の太鼓よて幕明(犬掛り)先達てより我君よは田樂を好ませ給ひ日毎に法師をお召に成り又此頃は犬を愛し大小名の献上に數千疋の犬の掛りのどつとせぬといふ愛へ浪人の母渚孫の泰松を連れて出て通り掛り此犬に母がかまざる愛へ浪士安達三郎出て北條家の暴政をそしりト、伴の犬を鉄扇にて打殺す犬掛り長崎次郎出て安達をからめどり成敗に行ふといふ母と孫命を捨ても安達を助けたといふ(長)犬を殺して我君と暴政成と悪口せしゆゑ今に首を並べてやる(安)かやうな成敗おされては當家は長く續くまひと無念の体(長)犬引立ると皆々上手へ這入る此道具上下へ残らせ引てとる

○同奥殿の場 本舞臺高式重高欄附一面は聚麻をおろし都て奥殿庭先の休聚廣上ると爰に高時侍女大せい妾衣笠酒宴のせりふあつて長崎次郎出て來り前に有し事といふ

(高)兼て國りへ歸置進子飼犬を害せし者死罪に致せ
といふ爰へ大佛陸奥守出て(大佛)愛犬の雲龍を害せし科
より安達并み母子死刑の御沙汰歐類の爲大切ある人
命を失ふは是大の道に非ず上を見習ふ下ゆゑ物の道理
も辨へざる下民の者がもし歐類を害せし者の一命を取し
其時に死刑の罰をめてがた普く萬民の手本なれば篤と
御賞賜めぐらされ助命の御沙汰を願ふといふ衣笠初め侍
女も共々願ふ高時立腹して諫言を用ひぬ爰へ秋田城介出
今日は月ハ替きと十三日御當家二代の執權職義時公の御
命日人命断はよろしからそ御不孝又相成は浪士親子の御
成敗は止まざ遊ばせといふ是にて高時死刑はゆるすと
いふ長崎下手へ這入る跡皆々禮をいつて大佛秋田も與へ
這入る高時又衣笠を相手と酒宴に成り俄に小夜風吹來り
燈し火消る衣笠侍女皆々あかしの川息も與へ這入る高時
残り秋の習ひと云乍見る間に空もかき曇りさい行月の影
もさく物のあいろもさからぬ池中へさらめく雷光ハ節

の替りに雷鳴あすかハテ物凄き空合しやあアと大さ何ぞ
よ成せどろくの鳴物にて日覆ひより天狗出るを高時見
てチ、汝ハ春日の田樂法師南圓防能参つたとは是より追ひ
く天狗出て六人に成り高時に神樂なぞらへし浪花
江といふ新曲を舞て見せるといふこなし高時夫は一段面
白からんリヤ早く所望じやくと是より「住の江の
松はどこしあへいといふるしおんそれさくと振事成
り天狗六人高時を連れ出し振事の内種々やまます事よつ
しくト、高時勞れてばつたを倒る、天狗見て手拍子を打
天王寺のや妖異星を見ざるかくくく」と囃子立る是を
秋田見てイテヤ化生を見顯さんといふ是にて天狗六人後
ろの襖へ消る秋田諸士四人衣笠出て高時を介抱する高時
心付さばつとす(秋田)君には田樂を舞せ給いたくお
勞れ被成し汚穢子か心儘に持遊ばせ(高)何心を慥にも
てとは(秋田)只今はにて田樂を舞し其眞の法師は非ずい
づれ天狗でムを升る(高)悔りして夫ハ誠の事かといふ皆

々杉戸の間より見たと言(秋田)去にても心得難きハ天王
寺の妖異星を見ざるかと手を打てはやせしが元妖星ハ凶
星かれハ若天王寺の其邊ハ凶變のある知らせ成か(高)是
ハ歐跡残りわれハ天狗が來たハ疑ひかし執權職の高時が
好める道ハ魂奪られ魔界の天狗に欺られしかと口惜しき
体是時日覆にて天狗六人ハ、く笑ふ(高)扱ハ妖魔の所
爲成しかと上を見上る幕
○四幕目本間山城邸宅の場 本舞臺向ふ一間の床の間ハ
幡宮の掛物三寶へ瓶子を乗備へ下手立關床の脇へ鎧兜太
刀ちど飾り有都て本間邸の体爰ハ藩中の女房貳人本間の
妻連住ひ居るしらへよて幕明と女房貳人新田の軍勢が押
て來ると聞升たがいやあ事でムリ升(連)夫と山城ハ日頃
より好める酒に不禮が有て御勘氣受て居るゆゑに此軍に
もお供が叶ハ走悔ハ一事じやと申升て御老臣の方々へ今
お詫に行しといふ女房二人神ハ誠を照し賜へハ八幡様の
御加護でもけふハ御免に成升ら能吉左右を御待被成ませ

と二人下手へ這入る跡へ若黨彌次郎歸り來て只今歸り升
た爰へ奥より本間刑部出てシテ軍の様子ハ(彌)當家様の
お持場所極樂寺の切通し道巾狭き坂道へ二千の兵を二手
に分山手と平地へ嚴重に兵を配りて防戦めれと新田の勇
將大節次郎一萬四千の兵を引き無二無三と攻來れば迎も
防戰變東あしといふ(刑)病苦でなくハ老たり共戰場へ防
戰なさんに悴ハ御勘氣取りてお供は叶ハす残念あり(連)
其お詫にお出ありしがもうお歸りてムリ升せう爰へ向ふ
より本間山城左衛門歸り來て(山)陣中こんなつ致せし故
運刻致し升た(刑)シテお詫はごふじや(山)一ツの功立
ねば叶ぬといふ(刑)お詫の叶ぬ上ははるが致す(山)一
先當地を立退ひて日和を見る所存夫又付父上へ濟ざる義
よハムリ升がお暇を願ふといふ(刑)シテ某や妻ハ(山)武
藏の川越にあなたの御舎弟民部殿が居住有は妻諸共夫へ
寓居を願ふといふ是より(連)彌(彌)兩人異見する(山)二君よ
仕へる望ゆゑ只何事も是迄の縁と思ひあきらめよ兩人テ

モ情あひふ心じやあア(刑)所詮留ても留らぬ性質いかよ
も暇を遣いさん少是より直其方他國へ出立致す所存
か(山)即刻出立致し升る(刑)行なら本心ゆかして參れ(山)
山)何本心をゆかせと(刑)一命捨る所存であらう(山)
おどろき入たる御けんさつ抑御先祖より九代積さし北條
家も滅する時の至りてや高時公が暴政に四民恨をいだ
くの折から新田義貞義兵を起し當鎌倉へ攻めし其勢凡十
萬餘騎治世もあつむ味方の由断に所詮防戦叶ひ難しお説
叶は、必死を極め討死なさんと思ひしが御免あければ是
非もなし實は是より菩提所まで切腹致す所存といふ(刑)
迎も死ぬな此刑部が殿へお説の書翰を送れば御馬前
於て討死致せ(山)ハ、忝なき其仰せ父よりお説下され、
ば必死を極めて敵將の首を討て御説を願はんと是より皆
々手傳甲冑を附八幡宮の神酒まで皆々別れの盃をさし(山)
山)左様ムらば父上様(刑)誠は是か(山)今生のお別れ、漣
一アモン鎧よとが(刑)いそがれ悴(山)ハット向ふへ這

入る妻の泣伏す「戰場さしてと此道具廻る
○極樂寺切通しの場 本舞臺一面の岩山真中、大佛甲冑
の武者四人扣へ居て(大佛)今朝よりして數度の合戦追々
敵も打破られ余義なく是へ引上たり爰へ武者一人出て只
今面ての知れざれど黒革れどしの鎧を若くし阿修羅王の
荒たる如きゆしし備なすものがふり升るといふ皆々
誰ならんといふ爰へ(彌)出て上り升る 大佛 汝ハ本間の
家來何用成ぞ(彌)刑部よりのお願ひと立書を出す(大
佛)見て願ひの趣き聞届けしぞといふ、笑を含てと道具廻
る
○同極樂寺口山手の場 本舞臺岩の張物松並木爰へ大佛
軍兵と五廻り皆々出て這入る爰へ本間山城出て兩人名無
合切結びト、組打も成り爰へ(彌)出て加勢をして本間は
大館の首を討、山)サア心地よやあ手負の体よて道具廻る
○本舞臺元の切通し本陣の道具以前の大佛兵士皆々扣へ
居る爰へ武者一人出て只今敵將大館か討れしといふ皆々

悦び何者あるか天晴過れし事だといふ爰へ(山)手負にて
(彌)介抱して出て來り是より首實檢ありて(大佛)今日の
手柄にめで勘氣をゆるすと(山)ハ、有難ふ存じ升る
と切腹する(彌)コイヤ御主人には何故に(山)御勘氣御免
がなければ切腹致す所存もし御免なれぬ討死を覚
と(大佛)あたら勇士を残念なり願て我も討死あし願途
で途ぞよ(山)お待申と言乍打伏に成る(大佛)誠は武士の
鏡じやなアと涙を拭ふ体揚擧の音よて幕
○五幕目稻村ヶ崎の場 本舞臺後ろ淺黄幕爰へ軍兵六人
立掛り浪の音よて幕明きのふの軍に大館様が討れたので
忽味方の崩れとなりあんを悔しし事いさひ夫故夜中の御
陣敵御大將義貞公よハ俄に演透へ御出陣又吾々が御主君
の物見ささんど出張ありし道市狭き難所ゆゑ見失ひし
と此筋をいつて下手へ這入る淺黄幕を切て落と
○本舞臺向ふ小高し山組前浪巾を張詰都て鎌倉稻村ヶ崎
の体義貞馬上よて兵士を隨ひ出て來り(義)いかに者其昨

日大館討れたれど夫にたゆたふ所に非ず今當義貞自ら通
で高時の首を得事掌の内よりありといふ皆々も勇ましさせ
りふあつてイヤや先手を仕らん爰へ藤塚伊賀守出て出馬
を止める皆々何ゆゑ御出馬止められしぞ(伊)某物見せし
所敵の要害堅固なりといふ(義)何程堅固成共蹴ちらして
通るといふ(伊)御所の上に地の理にくらく高一虎穴も落
入されば不覺を取難ひなしと此筋のせりふにて諫言す
る(義)斯迄重長諫めるは忠義の赤心左こそあらん此上の
蒼海の龍王へ祈禱をかけて難をさげんといふ(伊)シテ御
祈禱と(義)傳へ聞く漢の李廣は水盡渴に責られける時
劍を抜て岩石を刺しかば飛泉涌出と此筋のせりふあつて
太刀を携へ海底へ向ひ(義)義貞今臣たるの道を盡さん爲
に斧鉞を取て敵陣を望む其志し偏も王化を助け奉り蒼生
と安んず示さんと思ふにあり仰ぎ願はくば龍神臣が忠義
を鑑みて潮を萬里の外へ退け路を三軍の陣は開かしめ給
へど太刀を投込む仕掛にて浜の砂地も變る(伊)龍神納受



し給ひしか見る間も潮も干瀉と成る掛る奇瑞の有上り必
 定勝利も獲ひなし(義)一統勇んで出陣致せ「勇給ふぞ幕
 ○六幕目吉原土手の場 本舞臺向ふ吉原を見たる書判都
 て日本坂夜の体愛よひやかしの仕出し三人遊へ行といふ
 せりふにて上手へ這入る向ふより三河守綱國公諸士二人
 供をして出て来り土手へ掛ると關根彌次郎出て若殿暫く
 と留置より亂行の意見をもる綱國はを用ひて上手へ這入
 諸士も彌次郎汝の尋ねの身分よて御意見など、の片腹
 痛いと悪口して「上手へ這入る跡彌次郎困たものといふ
 愛へ豐岡紋三郎出て關根氏御さげんよろしといふ(彌)
 御身も若殿へ亂行を進めるさといふ(紋)イエを襟でいふ
 り升の餘義なひ事で初めて廊へ来たといふ(彌)随分其身
 を傾んだが能と意見する(紋)有難ふムリ升ると上手へ這
 入る(彌)コリヤいつそ廊へ参り若殿が出入り様斗らそ
 ねば相成らずと思案の体にて道具廻る
 ○揚屋町三浦屋の場 本舞臺向ふ九尺の床の間都て三浦

屋廣座敷の体愛よ綱國公諸士二人這手若い者茶屋の女扣
 へ居て只今お詠へといらんをお呼申て参り升と這入る
 跡は客三人残り(諸)只築地邊の邸と斗りおつしやつて決
 て御前のお名前をおつしやらせ則お國の名物故雪といふ
 お名にて又吾々の雨ごんは霞さんと此言合せの所へ若紫
 出て雪さん能来なんした奇アト若者茶屋女詠へ物の盛を
 運ぶ太鼓持出て座敷を取持愛へ又若者紋三郎を連れて出る
 (綱)何しよ参つた(紋)お櫛上の御用よてもムリ升せうか
 と(綱)参らず共能事をと愛へ新造八橋出て若紫一寸下
 迄顔をかして上あんし太鼓持其内陽氣を踊りませう(綱)
 イヤそちの踊りの所望でないわへと騒ぎ明にて道具廻る
 ○本舞臺庭先座敷の体愛に關根新造二人扣へ居て新造今
 かいらんがお目に掛り升といつて這入る跡は關根初めて
 参つた廓の様子實は傾國の世界じやなア愛へ若紫出(若)

とあなたさんでわらんすか若紫いわたしといふ關根も名を
 名乗御身の元へ度々通ふ三河守綱國公御見をして貴ひ
 度と頼む若紫知らぬといふ(彌)扱にお名前を御存じさひ
 かわれぞ川越大和侯より御養子にあられし越後家の御世
 嗣といふ若紫悔りしてわたしの父も大和様の家来浪人
 として貧苦を迫り此身を苦界へまづめる程れいらくなせ
 と御主の御恩忠義の爲ゆゑ命よかけ今宵限り此廓へか
 出ないやう御見るといふ關根悦び踊る跡へ綱國出て
 若紫愛相づかしをいふ綱國寸腹をるを八橋留て奥へ運て
 這入る跡に(若)古主の御恩にまがらむ義理もあぢきな
 ひ身の上じやあアト此道具廻る
 ○本舞臺元の廣間愛に綱國歸るといふを這手若い者太鼓
 持留て居る八橋出て歸るといひしやんすなら早ふ歸しや
 てくんぢまといふ皆々何の事だ愛へ紋三郎出て若殿暫

くと止め密談が有といふ是にて皆々奥へ這入る跡紋三郎
關根が形きたを害すとせせうかつよ愛ハ歸られ升ぬと
いふ(綱)返すくもよつくり彌次郎(紋)夫故今宵の(綱)
歸るまどすのか(紋)イエ左様でいふり升せぬと叫く(綱)
ム、とうちづく体にて此道具廻る

○本舞臺若紫の部屋の道具爰は楠木屋五郎介八橋酒を吞
居て越後家の贈さをする爰へ新造二人出て來り今雪さん
が爰へ來ると知らせる八橋さんガ歸り被成せぬとあひ
らんの命にかゝる故お歸しやといふ(五)おれいどふし
て呉る(八ッ)私しと一所にね出なんしと此人數皆々奥へ
這入る跡へ若紫出て今れ嘶しの様子では見たしの命を捨
ねばならぬと主人へ語るせりふあつて上手の家臺へ這入
跡へ八ッ橋出てあいに今夜は取込で五郎さんと嘶しも
出來ぬと言乍上手のせうじを明る内に若紫自害して居る

是を見て悔りせる体此道具廻る

○本舞臺元の日本堤以前の諸士豊岡仁平立掛り居て今若
紫駕が爰を通る事をいつて諸士の向ふへ這入る跡へ四
手駕出るを仁平提灯を切落す初かき逃て這入る此間に駕
の内へ白刀を突込中より以前の紋三郎手負にて出る仁平
見て悔りなし(仁)ヤ扱は大事を早くも知り親に手盛を喰
せしめと是より紋三郎親に異見のせりふあつて仁平改心
あし切腹しやうといふ所へ綱國よ五郎介供をして出來り
若紫といひ紋三郎に命を捨てたも此綱國が亂行故今日
より謹慎をし剃髮致すといふ五郎介秋出へ親が出入をし
て御恩に成た事をいふ仁平は暇を乞悻の菩提と吊ひ度と
いふト、紋三郎落入る皆々不便な有さまじやなア幕
○七幕目高田城大手先の場 本舞臺上手に見附の橋辻番
所の道具注連飾杯よろしく幕明と爰は田口官一郎荒川房

右衛門川上與惣次いづれも足輕よてせうじを仕作我々共

は若殿のお側小姓であつたが小栗の爲よ足輕に下られた
といふ(官)小栗といへは梓の大六が當家の御世嗣に成て
然もけふは初の登城(房)馳走聲を掛るのがいましくしひ
と言(與)何といふの詞をかけずもし咎めたらけんくわを
仕掛此お辻をこつちでこゝして亂法したと言が、らうと
言合せの所へ小栗の梓松平掃部頭と成り行列の人數出て
來り馳走聲を寄せ掛ぬと咎める此より言争ひも成りト、
けんくわの寸廻り爰へ大熊帯刀出て双方を留め元日早々
喧嘩をせずと身に預けるといふ爰へ岡島主水出で最早上
のお耳へ入しといふ是より三人の足輕ハ月番の山田へ預
けんと主水が連れて這入る行列の人數ハ表向がこつちの望
ミと城内へ皆々這入る跡よ大熊廻り小栗美作ハ器置われ
どおしいか赤邪曲といふ奸惡の病ひに責られあれで終る

不便なものだど此道具廻る

○於吟の方部屋の場 本舞臺向ふ銀襦袢都て妾の部屋の体
爰は腰元大せい双六をして居る爰へ奥女中野村出か部屋
様はと聞(腰)今御書齋でお認め物を被成てといふ爰へ爰
妾お吟出て野村どのがわたしに濃度とて掃部様の御登城
の事うといふ(野)もふ御存じでふり升さか(吟)直に小栗
様から知らせがあつたといふ向ふより腰元出て小栗様が内
々か逢を願ふと取次是にて腰元曾々奥へ這入る野村向ふ
へ這入る(吟)小栗様のお出い最前お文で仰せ越れし彼事
であらうわぬな向ふより小栗美作野村案内して出て來り
双方おいさつ有て野村奥へ這入る跡小栗今日の次第を話
整居仰せ附られしが此上の御大老の酒井侯へ取入して呉
と頼む是れをお吟受合一寸色合のもやうあつてト、逆さ
願書をと大きくいふを(小)コレと押へ疊へ書て見せる体

幕

○同返し長恩寺堤土橋の場 本舞臺上手に土橋向ふ手
 の書割都て武士村の体爰よか爲方と記せし旅を立一揆の
 八數大勢立掛り居て國よ書をす美作を今宵の内よ打取ん
 と勇み立爰へ片山左内郡七九郎出て一味に加はりイテく
 り出すといふ所へ萩田主馬早馬にて欠附一同を止め今日
 大公儀より某と永見比と召ゆる直様江戸表へ出立致せ
 ば沙汰のある迄早まるなどいふ皆々是を聞ず美作を討ね
 ば腹がいぬといふ(萩)田口川荒川の切腹御免と相成れ
 心免よ角萩田に無念を預け爰を引といふ皆々不服の体(萩)
 我詞を用ひずして騒亂させば國家はもつしゆ皆々ヤ
 アト悔りする(萩)とくく此場を引取べしといふ是にて
 皆々是非なく引上て運入る萩田はつとして皆々をやめ某
 江戸へ参り預りと相成る又ハ吉事の御沙汰なるか善う

悪か白雲の深山に残る越後路も早見納めと成んも知れ
 ず幕

○八幕目關田町植木屋の場 本舞臺向ふ大坂格子下手よ
 庭石を建かけ軒よ園子提灯都て植木屋内祭りの体爰よ植
 木屋職人三人下女赤飯を進めて居る祭りの鳴物よて幕明
 と萩田が長のお預け中濁死を仕たが夫に引のへ小栗様ハ
 御離縁よ成たお崎子の掃部様がお召返しに成り強氣な勢
 ひだと噂をする奥より妹お鶴出て兄さんへ聞へるから静
 にしろといふ爰へ向ふより植木屋五郎介女房お菊を連て
 尋ね來り皆々あいさつわつて職人三人下手へ運入る下女
 は奥へ知らせ運入る直よ奥より植木屋五平次出て是よ
 り江戸から來て弟子分よしてある金五郎は小さてが利て
 男もよく仕事は勿論茶があるのでおれより得意で氣よ入
 られけふも小栗様へつたといふ(鶴)夫故わたりや氣も

めてイエ何氣の毒でんそ(五平)事によつたら録よ仕様
 と思つて居ると此筋のせりふ渡す(五郎)夫に付て兄貴よ
 内々嘸しがあるとはにてお菊お鶴は着を拵へて一ト口出
 すと奥へ這入る跡よ五郎助咄しといふ小栗の郎へ能氣
 で出入を仕被成るか悪いと知て仕被成るか(五平)あつな
 事をいふがひひきを受けば大事な得意出入を仕ちやア悪
 のか是より兩人萩田と小栗の善惡の争ひよ成ト、五郎介
 兄弟の縁と切女房を去といふ(五平)勝手よしろといふ奥
 よりお菊お鶴出て双方をなだめる(五郎)手めへよ科の有
 めへが恩を知らねへ五平次の妹の女房に持て居れぬと言
 放して向ふへ這入る跡よ姉妹泣て居る(五平)おれが譚道
 を附てやるから泣な(お菊)アモ此儘よ去て置ては(お鶴)
 私も心が落付ぬ(五平)イヤおれの思案よ任せて置道具廻
 ○小栗邸茶室の場 本舞臺茶園の道具爰に植木屋金五

郎鉢前を直して居る諸士腰元皆々見て居てちつと休めど
 いふ(金)左様から一ぶくやつて休を升せうと是よりお崎
 の方かお客に來て居るといふ噂をして皆々奥へ這入る跡
 よ金五郎爰で茶を初まつて取らして置れまひと
 片付る奥より小栗美作出て金五郎太義でありしぞ(金)勿
 休なひ其お詞と是より美作鉢巻が能出來たといふ金五郎
 軸其外を譽るト、美作此所へ客來があるから遠慮しろと
 いふ(金)左様おれは花畑へ参り升て菊の手入を致し升
 うと上手へ這入る跡へお崎の方腰元附て出る腰元ハ切戸
 の外へ立て行是より美作お崎茶事寄せ色合のせりふの
 内大殿をさきものよする巧きといふ(美)首尾能行古き
 妻ハ毒薬にて爰へ妻おかん出掛り聞て居て(お勘)夫であ
 かた濟升か兩人エ、(お勘)アモ大それたそなたハア道
 具廻る

○本舞臺真中に詠への槍の木上下野菊の盛り以前の金五郎槍の木根方よりどくろ堀出し見て居る体にて背く變せし人骨の正しく毒氣にふれて死したるものこりや能証據が手に入らざと跡を元の如く直そ爰へ諸士二人出て何か見せぬかといふ(金)エ、諸士イヤそこを堀の見合せしるといふ(金)今日のもふ暮近く成升たから仕舞升と銀を置て向ふへ這入る跡二人槍の木の根方が氣に成堀て見様と兩人穴に成り此道具廻る

○本舞臺元の茶室美作の勘合吟を殺して死骸を井筒へ打込所へ二人の諸士どくろが見へぬが金五郎が怪しひと云(美)扱問者でありし五平次諸共かふめとれといふハッ二人這入る(美)彼といひはといひどふか無難よした物だどこのとき床の椿椿(美)ハッいさしし事共じやとへと幕

○本舞臺元の植木屋の道具か鶴住ひ居て留るも問す姉エさんが五郎介殿の所へいつたゆゑ兄さんも行しやんしたか困た事か出来たといふ爰へ金五郎歸り来るか鶴住の事をいふ金五郎けふは帯刀御免に成て是のら石燈籠を尋に行と五平次の道中差を借て直ま往て來升と向ふへ這入る是どそれ違ひ向ふより侍中間附て出て直ま内へ這入り小栗の邸から參つたが金五郎のいかせしと聞か鶴殿さまの急御用で石燈籠をさがしに參り升た(侍)扱こそ怪しひ可内參れと兩人向ふへ這入る引違つて向ふより五平次お菊下女歸り來て(五平)こつちのまとめる氣で待た小栗の邸へ出入をするから去といふから去状と手荷物又の取て來たお鶴金五郎の事又邸から人の來た事をいふ五平次ふしぎの体爰へ町役人同心番太出て小栗家よりのお下知まて金五郎の事に付調べがあるのら繩に掛れといふ皆々

悔としてどふいふ譯と聞(同心)夫の邸へ參つて聞ケそれ取り逃そな(五平)ソラ逃ろといつても逃やア仕ませんと廻る

○本舞臺一面の細矢來木戸口都て陣屋下の体金五郎出て夜通し急いで關川迄出ぬけて安心したいものだ爰へ役人捕人大せる出で面体を改め金五郎に違ひあひとは是より捕物の立廻りも成り皆々を追込懐ろより油紙も包もし物を松の後ろへ穴を堀て隠す爰へ又大勢捕人出て立廻りトッ金五郎刀が折れひるむ所をのし掛つて繩を掛ける件にて幕

○九幕目高田城内假半の場 本舞臺九尺の半爰は番人二人居て金五郎の噂をして居る向ふより中澤藤兵衛五郎介を連て出て番人へ酒手をやる二人は禮をいつて下手へ這入る藤兵衛金五郎を呼おこし五郎介に逢せる此内藤兵衛小屋へ行跡金五郎五郎介又向ひ濟ぬといふ五郎介おぬ一の爲に五平次兄妹が難儀をして居るから白狀しろと云

(金)實は水戸家の問者にて關口三郎兵衛といふもの小栗の悪事を見出さんと此越後へ入込しが何卒こなた陣屋下の松の根方は生てあるどくろを水戸へ居てくれといふ筋を咄す五郎介悔りして是を受合向ふへ這入る藤兵衛出て半を明けて三郎兵衛逃すといふ(金)忝ひ藤兵衛は刀を腹へ突立て寐たふりをして聞て居たといふ(金)こなたの跡は立派に立るといふ爰へ赤合羽の中間出て扱こそ半抜金雨に幸ひ(藤)是もあみたのれさつけ南無あを陀佛と廻る○本舞臺岡田回向院境内の体爰は百姓孫市見世物の木戸番に打れるを茶屋女留て二人の上手へ這入る爰へ六幕目の仁平坊主に成て出來る孫市に逢(孫)何で剃髪したと聞此譯はどこぞへ往て喇ううと二人上手へ這入る跡へ大野次郎兵衛お雪の女占ひを連て出て茶見世まで口説事行てお雪の得心せず上手へ這入る大野仲間と俱に歸り行此時向ふより關根彌次郎虛無僧にて出て摺違ひ二人は向ふへ這入る關根是を見送る体にて幕

○十幕目 隅田堤三國下の場 本舞臺向ふ土手前に家根船
 爰に船頭中間旦那の心附で一盃吞で来やうと這入る跡
 舟のすだれを上げ爰に大野と雪乗て居て女房に成たら
 親の敵をふへて遣るといふ雪聞ぬ内ハ枕のかりさぬ
 といふ大野せひさく敵ハ關根だといふ此内關根深福の
 浪人にて釣を仕乍聞て居て舟へ飛乗次郎兵衛を引出す此
 時舟頭中間出て是ハ大變と逃て行跡へ法山孫市出て來り
 大野を引立詮儀をしたら小栗が惡事がしれ升せうといふ
 爰へ山野邊ヲ稅舟頭中間案内して出て是より關根に子細
 を尋ねる(彌)小栗美作我意も寡り主家を押領さすこやつ
 ハ惡事の手先きを働く大野次郎兵衛とや者(次)イヤ此關
 根ハ越後家の尋ね者といふ(主)何ハ兎もゆれ我君が下
 郎へ心越し成ば身共ど一所よと此人數皆々上手へ這入る
 跡にお雪残り昔覺へた易學ヲ助けとなりし占ひも敵の知
 れぬハ陰陽師身の上知らずの世のたとへどぞ敵が知り
 度者じやなど大野の紙人を拾ひこりや能物が道具廻る

○水戸家下郎の場 本舞臺高貳重庭前の道具主稅出て召
 捕し事をいふ與より水府出て一統呼出し關根大野法山孫
 市仲間出て水府公の知らべに成り双方よと訴へる事有て
 お雪紙入の中の密書を持って出是にて大野小栗の惡事を殘
 らせ白狀する爰へ關口三郎兵衛とくろヲ携へ出仕なしお
 雪の親の敵も矢張小栗と知れ其時手傳ひし次郎兵衛も敵
 故越後家落着次鎧敵を討せるといふ法山も惡事又組せし
 が悴を手に掛敷兼せし事をいふ(關口)中澤の跡の事
 解ふ水府公白の片袖を關根に見せる(彌)コリヤ是萩田が
 自筆の願書(水)我枕邊へありくと參り老夢を見し故よ
 斯逆心を勞せし光誠(關口)誠は君の御苦勞ハ(主)上から
 見ぬ皆々天下の補佐賊(水)只見をはなんの苦もなき水
 鳥の足よひまるき我心(彌)一同感悅皆々仕り升る幕
 ○大切森狂言の内猿若レヲツキ兩人出長唄連中の所作事
 有りて大名這入ると故若残り爰へ安宅丸の舟頭六人出て
 賑やか所作事わつて目出度打出し



074825-001-6

特54-66

猿若座筋書

松谷堂

M17

CEK-0162

